沼尻桂一郎編輯

西南太平記

十二号

下

A438
16

西南太平記十二編巻之下

東京　沼尻経一郎編輯

第廿四回

甲突川ふ官軍謀て逆徒を破る
并兇徒大山彦八の一子最期

偖も五月七日午後四時頃中村白石ちうの兇徒と追拂ひ又官軍ハシイバ。トハエノ間ふ為いて哨兵小ぜを合しるり翌八日の朝二百名の兇徒を襲ひ来る両軍二時間戦ひ兇徒を打ち拂ひ

48-7799

まと鹿兒島ふてい去る五日の朝官軍城山上ふ砲臺を築き中腹ふ柵を設け兇徒柵際まで進む我待ち今や遲しと官兵い勇氣凛然としてて至りしが逆軍の面々い隊將真先ふあり霞の中ふ大旗を翩翻と閃し兇徒い忽ち勇を進んで我れ劣らじと既ふ山の中腹なる柵の際まで進そしかと待設けたる官兵ハ此の兇徒を齏粉にす呉んぞと大砲を

して一時ふ連發すその砲聲空ふ轟き恰も霹靂の碎けて落るが如くなりしかば逆軍い之れふ應撃し千變萬化ふ其の黒烟の隙を潜り此所彼所より白刃を閃かして猛り立たる兇徒ハ連発の中ふ切り込たれど官兵之を事ともせず奮撃突戰し暫時い互ひふ火花を散らして戰ひしが兇徒い終ふ官軍の多勢ふや敵しがたく今い手痛く撃

れ総山崩れとなりしに逆将野瀬い是を見て大に怒り拙き味方の面々かゝる何ぞ是しきの接戦且つ大敵と云て恐るゝるんや奴人に等しき官兵如ぎ十名として我兵の只一人に足れり卒踏止まり我れと倶に續けや〳〵と大音上に呼わり大旗を揮て只一騎取て返し群がる官軍の中に乗り込て當る残幸ひ切り立て恰も夜刃の荒たる如く奮激突戦に逆軍も之が為めに再び取て返し戦ひたるに其砲聲萬雷の如く山岳之れがために震ふに至れり然れど官兵い少しも屈する色なく勇進猛烈なるに流石の兇徒も盡くすに術なく終に破軍なりたるに官軍の此時勝ふ乗じてそを討ち取れやと各々狙撃したりしかば何しあに逆将野瀬い銃丸に中りて終ひに死したりける

因て曰く野瀬彌九郎い戊辰の役よも戰地へ出てその後ち分隊長を務め今度の暴挙ハ風て戰場へ出張し居たるものゝと云ふ

既ふ兇徒い嶽村と指して敗走す正午十二時ふて鹿児島町家及び士族の屋敷等一里半計りを焼拂ひたれバ人民の狼狽言ん方なゝりしと却説薩摩の堺なる石坂て向ひし官

軍い去る四日ふ大て進ミて石坂の逆兵と戰ふ〻一時間ふて遂ふ同所を攻め取り猫も此手い追々進軍の用意ふく此の日猫谷の方ふも砲戰ありたりとぞ斯て同六日午前十一時十分鹿児島縣下山野ふかいく静間少佐の手い開戰したるゞ午後二時頃逆軍い死傷を棄て敗走し同三時ふ戰ひ止ミたり此日生捕十餘名銃器十四挺を分捕しゞ逆徒

鹿児嶋の
町放火し
て人民狼
狽す

の死傷い數知をざりしと時ふ官軍の即死僅
うふ三人のみなりと蓋し當時薩摩の兇徒い
鹿兒島城を離るゝ事凡一里半乃至三里を
隔てたる谷山、伊數の近在或いその都城る
る加治木、蒲生、重留、國分、伊集院、川邊、市
来、阿久根、より亘りて官軍ゟ抗ぜんとするもの
如しい同九日まゝとい十日にいゝり鹿兒島の兇
徒の伊數、加治木、伊集院、の三ケ處等にて桐

野利秋い加治木ゟ在り村田新八ハ伊集院ゟ
在りとの事過日村田新八い討死とありつる
ゞ深手を負て病院ゟ治療せしとゝいふ其死
生の程い確るゝず又島津父子い曾て官軍
の着港せざる前左の書面を縣官へ贈らゝ
たりと云ふ

今般熊本縣下ニ於テ戰爭ニ付テハ自
然前海ヘ軍艦多數到着モ難計其ノ

節ハ縣下一統恭順ヲ主トシ方向ヲ誤ラ
ザル様未然ニ告諭相成度拙者共聊カ
見込ノ趣モ有之且於身上者職務無之
候故是迄沈黙致シ居リ候得共數万人
民困難ニ陥リ候儀傍觀ニ不忍非常ノ
時機不得止此段申入候也

四月廿三日

従二位島津久光
従三位島津忠義

又西郷隆盛ガ嘗テ大山綱良の縣令タリシ時
贈リシ書翰ヲ
迫田隆蔵外一名御遣ヒ被下来船の次
第勅使下向ノ承知致シ候下拙事柄分リ兼
候得共彼官軍ト方策も盡き果候て調
和之論ヲ落ち候ら畢竟敵方ヲあいこ
熊本籠城ヲ相成候てハ各縣蜂起可致
ヲ付全力を熊本ヲ相盡シ猶是事破

れ候ゝて最早無二致方一それ切との策相ひ
立候儀慥と聞得候と付即ち彼の巣中
ゟ陥り此籠城を餌とし〳〵四方の寄手
を打ち破り候得ば此処よて勝敗相ひ決
し可申地形と云ひ人気といひ其の所を
得候と付我兵も一向此處と力を尽し候
ところ既と戦ひも峠を切り通し六七
分の所と打付て今や孟賁ありとも再び

戦勢とりり返すの期有之間敷餘ゝど
敵の兵氣も挫け候と付少しく此の間と
息を休め油断為致候て又一策を廻ら
し候目算に相違無二御座一候間決て狸と
だまされざるところ肝要の事と御坐候征
討総督の令出候間差上置候全く暗殺
い打消し候趣き合戦と幸ひと致候旨と
相見え可二悪の巧と一御坐候然る上ハ何分

島津父子
櫻島ヨ自
ら恭順を
ゐさんとす

曲直分明なるゝざれを鎮撫もへちまも
無之断然條理ゝ不相戻候ところ御盡力
可被成候最初より我等ゝ於ていい勝敗
とりゝ論ず候譯ゝいい無之本々一つの
條理ゝ斃され候見込の事ゝ付その邊い
御汲取り被下候様偏ゝ企望いたし候也

三月十二日　西郷吉之助

大山綱良殿

過る四月一日ゝ三の嶽の戦争の際き斥候
として警視隊より派出したる巡査佐藤
宇吉の得たる逆徒の隊長人名録なりし間
しか在三月二十三日以来日々ゝ記しあるし
と云ふ

傳云巡査佐藤宇吉い阿波の國麻殖郡
第五大區一小區牛の島村の農佐藤伊
三郎の長男なり（本年廿九歳）性質強壮ゝく

力衆ふさぐれたるを兼々身とりつゝ御
国恩の万一ゝ報ぜんとの志あつく遂ひゝ
東京ゝ出巡査と拝命し第六方面一分署
詰となりて深川久右衛門新田ゝ住まゝ
て平常の勤務ゝ怠らざるいつゝも更らゝ
れど去年の夏深川蛤町の河岸を巡行の
折節俄ゝ雨の降り出て干鰯の荷揚げを
する船ゝて荷物と濡らさじと狼狽騒ぐ

を笑止とや思いれけん小揚が二人で運ぶ
荷を手軽く一人で運びれたるゝその大力
の程顕りまて人々驚嘆したりと云ふ其
後熊本の神風黨三重縣の騒擾ゝどゝ
も頻りゝ出張を望まれしが今年ゝ入り
て鹿児島の逆徒起ると聞くよりも此度
こそはと待れしが三月下旬ゝ入りて出張
の命を蒙り悦び勇みて戦死ゝ赴むき

彼の三の嶽の戰場ゝ只一人して斥候をゝ
せしと云ふ
亦兇営近く窺ふとゝり彼の三の嶽ゝ二人の兇徒
が顕れ出で夫と見るより擊てかゝる我佐藤宇
吉ハ二人と對手として少も憂まず戰ひしが
難ゝ一人を斬り倒すゝ叶ハントとや思ひけ
ん一人ハ外して遁るゝを斥候の身の長逐ひ
して斬ハるゝ本意ゝあゝず若し逆情を

探索の手掛りゝもやと一人の死骸の懐中
を探さぐつて則ち得たるところの小冊が彼の
人名録ゝてありしとぞ
既ゝ鹿兒島の兇徒の屯在為しけるハ伊敷
加治木、伊集院等ゝありしが去る五日開戰以来
屢襲来るの逆徒ハ專ら城山を官兵の為め
ゝ占られたるを遺憾として是を拔んとの
志ゝて城の背面ハ山路羊腸として通行さ

巡査佐藤氏深川の濱ニ怪力を顯ハす

へ容易く紛れ常に甲突川の方より襲ひ来れど官兵は此川中に竹柵を結ひ廻し其の以内に哨兵を置き胸壁を岸につくり兇徒来りて竹柵に觸るや忽ちに發砲して撃ち破るゆゑ大に辟易して激烈なる戦爭に至らずとなり

茲に亦戦地より数ケ處の手疵を負ひ然れども気は張り弓に我が家の門へ馳入つて草鞋も其儘玄関の式臺へ片足かけて母上唯今帰りましたと言入れし倦気の弛るを動と卒倒る物音と唯事ならずと母親が障子引明け立出れば朱に染たる我子彦太郎の其姿なるにハッとたじろぎに抱き起して家内の者に呼び立て薬に水よと介抱に氣息吹替へて喃母上おるかしや兼ねて貴君も御兼知の通り幼年の者五十人を一隊とせ

しその長ゝ推拳せられて去る頃肥後の佐敷ゝ出張るゝ晝夜を分たぬ戰爭ゝ彈傷三ケ所負たれど猶も屈せず働くうち大將西郷先生も人吉と差く退ろうとゝ引揚よとの指揮ゝ任せ兵を纒めて退く折しも追討の官兵急ゝして高原迄まで來る程ゝ肩と胸部とゝ深痍を負迚も同行なしがさしと我が隊中へ仔細を告げ道引違へて帰りしも再び兵を徵募るゝ討て出んとおもひしゝ人目を憚る夜の道ゝ痍所の惱ゝ甚しく野原の露の消えんとせしハ幾度の事ゝ知もざりしゝ先づお悦びなされませ西郷先生始ドめとして皆人吉ゝ御在陣此の事お聞せ申すのゝ何寄りのお土産と始終をかゝる語の末舌も縺れて面色変り母上様殘念で候いかしと云ふ一

言を名残よしゝ果敢なく其所よ絶命し
ハ大山少将の姉智なる大山彦八の一子彦
太郎よて今年僅ゝ十四歳よて器量才幹
大人も及ざりしとの聲誉ありしを惜し
や兇徒よかゝらハれゝ非命の最期を遂げ
させたるハ甚ど歎かハしきの至りなりと叔
父大山少将ハ官軍の参謀たり大山彦八の
一子ハ幼年ふして暴徒よ與し叔父甥と分

れ敵味方となり既よ順逆の道よ踏迷ひ王
師ふ敵する無道の戰争なりゝんや
然れバ八代口出張の官軍ハ同六日八日共逆軍
シイハ口よ襲来せしふ依て官軍ハ却てその
機よ乘ド白岩し中村等を奪取りたり同日
逆軍又クキノ口ふ襲来し迂回兵を用ひ我
巡査隊ハ其の逆軍よ打立られ終よ敗れて
大関山および久野木と捨て退く同九日佐

大山の一子母よ戦地の事情を物語る

敷口の兵を進め工ヒラセを乗取ると両度
ゴ至りたれども終に逆徒の為に取り戻
さるゝの遺憾なることゝなりしが一體の守線に
進みたるもとゝ又其後巡査隊に石坂まで引
上たるが遂に逆徒の為に石坂をも襲れた
れば巡査隊に此所を守ると能はずして石坂
を捨てワタリ迫引上たりと右に付第三旅團
に水俣より佐敷までの間に繰込を巡査隊と連

絡ーレゼンシを指ーて進軍せんとの目的に
て同十三日早天より巡査隊に既に水俣迄繰込
たれど此手に不利多く逆勢大に盛なりと又熊本
の舊知事より説諭に出したる者同月十二日ふ
人吉より帰り報じて曰く党徒等に人吉に本営を構
て守備を嚴に一人も他郷より其境に入を許ず
薩肥両逆徒の論に全く合體ー始終一致ーて事
を謀り其他の逆徒等皆之に従ふ池邊吉十郎に

舊知事の説諭を謝して人吉より租稅を取立
弾藥ハ日々千發宛を製し二年と支るゝ足と
云ひ士氣を養ひ何れの口より出て敗軍の
恥辱を雪ぐんと是ハ確信ずべき報なりと又大分
縣下の騒擾ハ一旦鎮定せしが其後人心鬼角穏
らざりしが又も同十三日の大分縣下佐伯ゝ
おいて百名計りの党徒集り同縣下レゲヲ力の
分署へ向つて襲来したるが巡査等ハ思ひ設

けぬことゝなるとび度を失ひしが此所ぞと足を踏止め
追返し防戦したるが何分不意のことゝなるとび遂ゝ巡
査ハ〻ヘノイチへと敗走したり夫より逆徒ハ直に縣
廳ゝ進んとの勢ひなれば速うゝ巡査と廻さまた
しと同縣より申越しゝ付東京よりハ巡査千餘
名を同縣下へ廻され又別隊ゝ巡査三百名を鹿
兒島へ何れも同十七十八日とゝお廻しゝ相成海
岸よりハ海軍兵ゞ追々ゝ上陸せしと又去る十三

日ハ逆徒三百名計り日向口より出て大分縣下谷田の警察所及區裁判所を襲へり官吏巡査ハ之を避け死傷とまるー兇徒ハ其侭竹田を守る追々城中ヨ入りーと又逆徒の肥後地ヨ拘留せー者凡二千人計り此度長崎へ移さるヨ付既ヨ島津父子と始め鹿兒島市中の者ハ多く櫻島へ引移りしも亦同所の混雜一方ならず此島ハ粟作のみ又て在来の郷士農民のみにても食料餘りある地多く移住不日大ヨ困難るべーと又殊ヨ飲水甚ど惡く炎暑ヨ至つての困却実ヨ思ひ遣らるー兇徒ハ肥後ヨ有る頃金錢ヨ乏しき侭人足雇料ヨ米を以て換しも渡せーとなり

之れよりて官軍竹田城へ進擊し鶴崎ヨ拠つて日向路に大戰ひなりて釈を第十三編へ記載そべー

西南太平記十二編巻之下終

明治十年五月一日 御届
仝 十年六月二十三日 出版
東京堀江町二丁目二番地
安達平七止宿
編輯兼 茨城縣平民 沼尻絃一郎
出板人 江島喜兵衛
東京書林 賣捌人
定價廿二錢五厘

萬菱閣製本各地專賣書籍館
江島喜兵衛

東京
北畠茂兵衛
稲田佐兵衛
山中市兵衛
小林新兵衛
九家善七
村上勘兵衛
中村佐助
牧野吉兵衛
柳川梅次郎
水野慶次郎

東京
林萬次郎
石川治兵衛
荒川藤兵衛
太田金右衛門
北澤伊八
朝倉久兵衛
青山清吉
鈴木忠藏
山中孝之助
山中北郎

東京　山田藤助　東京　吉川半七
同　東生龜次郎　甲斐山梨　内藤傳右衛門
同　岡田文助　伊豆三島　小西又三郎
西京　大谷仁兵衛　武藏深谷　酒井省吾
同　永田調兵衛　同　小野脩三
同　藤井孫兵衛　同　鴻巢長島爲一郎
大坂　柳原喜兵衛　下総佐原　朝野利兵衛
同　前川善兵衛　同　野田茂木林藏
同　前川源七郎　同　布佐　榎本次郎右衛門
同　吉岡平助　同　谷市場　太田儀助
同　松村九兵衛　常陸長竿　菊池儀助
同　岡田茂兵衛　美濃大垣　岡安慶助
同　梅原龜七　同　平野利兵衛
同　中島德兵衛　同　久保田鐵藏

同　赤志忠七　同　岐阜　水谷善七
伊勢四日市　伊藤善太郎　同　山岸彌左衛門
同　小田　加藤長平　同　笠松　玉井忠造
尾張名古屋　片野東四郎　信濃長野　西澤喜太郎
同　栗田東平　同　上田　伊藤甲造
同　矢田藤兵衛　上野桐生　竹内藤吉
同　鬼頭平兵衛　下野宇都宮　崎尾新右衛門
同　鬼頭松次郎　同　田野邊忠兵衛
同　三輪伊六　同　岩代若松　森萬助
同　三輪文次郎　同　福島　齊藤彦太郎
三河舉母　菅江笑三　陸前仙臺　菅原安兵衛
同　岡崎伊藤文吉　同　白木安右衛門
同　新城蔦家英吉　羽後秋田　本間金之助
同　豐橋高須又八　羽前上山　高橋庄三郎

遠江濱松　落合清七　同　山形市村五郎兵衛
同　松塚聚人　同　平田彌平治
同　齊藤太兵衛　同　中川久助
同　山下仁兵衛　越中富山　土井宇三郎
同　一貫社　同　守川吉兵衛
同　白木健二郎　同　中川甚藏
同　見附　古澤良作　同　大橋甚吾
同　二俣　天井金藏　同　川上章
同　掛川　大塚好五郎　同　高岡　車平次郎
駿河藤枝　淺井安兵衛　越後長岡　中村作平
同　靜岡　佐藤俊平　同　松田周平
同　沼津　廣瀨市藏　同　葛塚　弦卷七十郎
同　吉成壽三郎　同四ツ谷濱村　佐藤友吉
同　小松浦　吉周防山口　阿部準輔

010190507730